人間観察アパート

前川　美和

真夏の土曜日の十一時、ニホンザルのガイドは客の前で、これから案内する施設について少々気取った様子で説明した。

「ようこそ、いらっしゃいました。今から皆様をお連れするのは『人間観察アパート』と称される建物です。人間の生の生活が観察できるように、できるだけ彼らの住空間に近づけた環境を心がけていまして、好評をいただいています。こちらは六階建てになっていまして、各階には一世帯が暮らしています。各部屋の前にはそこに棲息する人間の特色を示す呼称が書かれたプレートが張り付けられていますので、参考になさってください。皆様には各部屋に設けられたマジックミラーを覗いていただきます。向こうからは全く見えない仕組みになっていますので、ご安心ください。

なお、このアパートの住人が外出するのは自由になっています。買い物をするためのモールや公園なども充実させています。そういうこともあってか、ここの人間たちの寿命が他の施設のものより長くなっているのも私どもの自慢の一つなのです。ただ、住人が出てきましたら、わたしがお声掛けをいたしますので、彼らに姿を見られないようにご注意ください。見学の途中、分からないことがあれば、いつでもご質問ください」

案内係のサルは自信たっぷりに挨拶をし、今回の見学者たちの顔を見回した。ライオン、キリン、アザラシ、ネコ、クジャクたちが期待に目をキラキラさせて、スタンバイしている。

「では、そろそろ行きましょうか。まず、見学者専用エレベーターで最上階の六階まで上がります。六階には『パラサイト・シングル』と呼ばれる人間が生活しています」

エレベーターに乗り込むと、早速ライオンが尋ねた。

『『パラサイト・シングル』ってどういう意味ですか」

『『パラサイト』は寄生する、『シングル』は独身ということですので、成人しても結婚せず、親と同居して、仕事はあるものの、身の回りの世話など親がかりになっている子どもたちのことです。エレベーターをお下りになって、マジックミラーでご覧ください」

エレベーターのドアが開くと、皆、ミラーを覗き始めた。

パジャマを着た背の高い若い男がボサボサの頭をグラグラさせ、あくびをしながら二階から降りてきた。

「腹減った。何か食い物、ない？」

アイロンをかけていた年配の女が顔をあげて言った。

「もうすぐ昼ごはんにするから、ちょっと待っててね」

「分かった」

「洗濯物、出しといてね。いい天気だし」

男は面倒そうな顔をして、二階の自分の部屋に戻り、Tシャツ、カッターシャツ、ジーンズなどを両手いっぱいに抱えて下りてきた。女はそれを受け取ると、早速洗濯機に放り込んで、スイッチを押した。そして、やりかけのアイロンを終わらせると、台所に立って、焼きそばを炒めはじめた。ジュージューという肉の焼ける音と香ばしいソースのにおいが漏れてきて、動物たちは鼻をヒクヒクさせている。その間、男は食卓に座って新聞を読ん

でいる。生野菜とハムのサラダも手際よく作った女は、隣りの部屋でパソコンをいじっている年配の男に声をかける。
「お父さんも御飯ですよ」
　三人は食卓についた。焼きそばを食べる手を止めて、年配の男が口を開いた。
「きのうも遅かったな。一時過ぎてたみたいだな」
「ああ、課の飲み会があったから…」
「あんまり遅くなると、母さん、心配するぞ」
「分かってるけど、付き合いだから仕方ないよ」
　若い男は一瞬うんざりした顔をして、食べるだけ食べると、さっさと自分の部屋に戻ってしまい、食卓には老夫婦が残された。
「あいつ、いくつになったんだ？」
「七月生まれですから、三十六になったところかしらね」
「誰か、いい人はいないのか」
「さあ、付き合ってる人はいるようですけどね。結婚する気があるのかどうか…」
「女の子の方もか？」
「今どきの若い人たちには結婚願望があんまりないみたいですよ。結婚して子どもを育てるのが面倒なんでしょうね」
「面倒って…、おまえ」
　その頃、自室に逃げた若い男は、結婚して子どももいる男友達と電話していた。男友達は若い男を飲みに誘っている。
「来週の週末、ビアガーデンに行かないか？」
「いいね。こんな猛暑が続いたんじゃ、ビール、飲まずにいられるかって感じだな。元気か？」
「お疲れモードだよ。おまえがうらやましいよ。実家で炊事洗濯、全部お母さん任せで、のんびりしてるんだろう？」
「早まって結婚なんかするからだよ。付き合ってて楽しい女が、結婚して楽しいとは言えないからね。若い女の関心事は、八十パーセント以上ファッション、つまり、どう見栄えをよくするかってことさ」
「そうかもね。うちのも付き合ってるときは話してて頭のよく切れるしっかりした女性だと思ってたのに、結婚してみたら、家事も炊事も何もできないから、びっくりしたよ」
「彼女もずっと実家から出てなかったよね。俺と一緒さ」
「子どもが生まれてからは、俺が家に帰ったら、待ってましたとばかりに子どもを押し付けてくるんだよ。専業主婦でブクブク太りやがって、すでに女、捨ててしまったみたいだ」
「ご愁傷様だな。でも、それが結婚生活なんじゃないか。共同生活になると、お互いの素の部分も否応なしに見ることになるんだよ。きれいごとではいかないよ。でも、子どもはかわいいんだろ？」
「まあな。寝顔はかわいいよ。いくら見てても見飽きないくらい。それはそうと、お前の親、いくつになった？」
「親父が六十三で、おふくろが五十八かな。どうしてだ？」
「うち、おふくろが二年前に死んで、おやじが七十六なんだけど、ちょっと認知、入って

きたみたいでさ。同居しないといけないかなって思ってるんだ。おまえも親の世話をしないといけない時がいつか来るよ」
「そうなったら、特別養護老人施設に放り込むさ。昔は入りにくかったらしいけど、今は人口も減って、公共の施設にも待たなくてもすっと入居できるって聞いたよ。利用価値のなくなった親なんかウザいだけだろ？」
「おまえ、ちょっと冷たすぎるんじゃ…」
「妙に情けをかけると、どっちつかずになるよ。おまえの場合は親を取るか、嫁と子どもを取るか決めておかないとだめだと思うよ。両方は無理だよ。家庭が崩壊しかねない」
「そんなもんかな。一度真剣に考えてみるよ。後悔したくないからな」
「ああ」
「じゃ、来週、またな」

ミラー越しに老夫婦と息子の様子に見入っていたライオンはたてがみを逆立てて吠えまくる。
「なんだ、あの若いオスは！　三十六にもなって両親に身の回りの世話をしてもらいながら、老後をみてやるつもりは皆無だ。あれが人間の生き方なのか？」
サルがわが意を得たりとばかりに解説する。
「実は、この手の若者が増えてきたのです。昔は適齢期を過ぎても結婚しないで実家にいるのは恥ずかしかったようですが、今は周りの連中にもパラサイトが多いから平気なんですよ」
「どうして自立しないんだ？」
「楽だからですよ。掃除も洗濯も料理も、全部母親がなんの文句も言わずに、やってくれるから、気を使わないで、自分のしたいことができるんです。結婚すると、そうはいきませんからね。それまで異なる習慣や価値観の下で生きてきた二人が共同生活するとなると、すべてにおいて衝突、対話、妥協という手続きを踏まなくちゃならない。家事や育児も分担しなければならない。なかなか精神が消耗するものですからね」
「軟弱な選択をしているということだな。ライオンの世界では、大人になったオスは、今まで共に生きてきた両親と兄妹たちの群れから、否応なく追い出されてしまう。仕方がないから放浪の旅に出る。その旅の中で、違う群れから追い出された若いオスと出会って、二匹が行動を共にすることが多い。協力して獲物をとって分け合い、危険を乗り越えることを通して、狩りの方法や戦いの技術を学び、肉体的にも精神的にも成長するのだ。そして、各々が他の群れのボスに戦いを挑み、倒すことができれば、自分の群れができる。負ければ、また放浪生活を余儀なくされる。厳しい世界なのだ。それに引き替え、このパラサイト野郎は自立しようとせず、安穏と両親の庇護のもとで暮らしている。親も親だ。子どもを自立させようとしないのか。突き放して、新しい家庭を作るように促さないのか」
「少子化で夫婦の間にできる子どもの数が一人か二人になったのです。育児にかかる時間も費用も少なくなったおかげで、親に余裕ができたことがありますね。子どもとずっと一緒にいたいという気持ちも強いようですね」
「じゃ、子どもは一生親と暮らすのか」
「そういう人もいますし、結婚したらしたで、今度は実家依存型の生活を送る傾向があり

ますね。週に何回も実家に入り浸って、食事も食べさせてもらい、風呂も入れてもらって、自分はゴロゴロする。親は親で老後の面倒をみてもらおうという下心があるから、ホイホイ世話をする。われわれサルの社会でも、娘はずっと群れの中で母親と一緒に生活しますが、さすがにオスは大人になると、やはり群れから追い出されますね」
「当然だ。近親相姦を避けて、健全な群れを保つためにも必要なことだ。親と子どもがくっついて依存しつづけるとは、人間の社会はなんと不健全な社会なんだろう。気味が悪い」
キリンも同調する。
「子離れできない親と親離れしない子どもの社会なんですね。しかも、子どもは老いた両親の世話をする気なんてサラサラない。親も子どもも幼稚化が進んでるようですね」
「まあまあ、ライオンさんもキリンさんも、そう興奮なさらずに…。そろそろ五階に降りますよ」
エレベーターのドアが開くと、その部屋には「育メン」というプレートがついている。それを見たネコが尋ねた。
「『イケメン』っていうのは聞いたことがあるわ。ハンサムな男のことでしょう？　『育メン』ってどんな男？」
サルが笑いながら答えた。
「『育』は育児する、『メン』はネコさんのいうように男ですから、育児を積極的に行う男ということです。妻の出産後産休をとることもあるし、子育て中のパパの集会に参加することもあるようですよ」
「何だか想像つかないわ。ネコの世界ではオスは育児にかかわらないもの」
「そうですね。じゃ、『育メン』ぶりを皆で見てみましょう」

若い男が三か月くらいの赤ちゃんのオムツを替えている。
「あらら、こんなにウンチしちゃって…。きれいにしようね」
男は慣れた手つきでお尻を拭き、新しい紙オムツに交換した。
「これで、気持ちよくなったね」
傍らで、完璧に化粧した若い女が渋面を作って言った。
「毎日毎日アパートの一室で萌と二人っきりでいると、泣きたくなっちゃう。誰かと話したり、外の空気に触れたいって思っても、萌のせいで何もできないし。ノイローゼになっちゃうわ。産後、鬱になる女の人の気持ち、すごく分かる」
「週末は僕が助けてるじゃないか」
「ありがたいって思ってるわ」
「で、きょうはどこに行くの？」
「友里とランチして、アウトレット、覗いてくるわ」
「何時ごろ帰るんだい？」
「そうね。六時には…。何か晩御飯、買ってくるわ。萌のことお願いね」
「分かった。いってらっしゃい」
女は赤ちゃんの頬にキスをして、バイバイと手を振って弾むように出かけた。赤ちゃんと二人になった男は赤ちゃんに話しかける。
「ママは毎日萌と二人で大変ですからね。たまに自由にしてあげないとね」

男は、一時間ほど前に干した赤ちゃん布団を軽く叩いて取り込んで、カップ麺でも食べようとやかんをヒーターにのせた。
赤ん坊はオムツを替えてもらって気分がよくなったのか、一人で天井を眺めて、意味不明のかわいらしい声を出して遊んでいたが、しばらくすると、ぐずり始めた。カップ麺をすすっていた男は「ちょっと待ってね」と急いで残りの麺をかきこんだ。
「おなかが空いたんだね。ミルク、作ってあげるからね」
男は哺乳瓶に粉ミルクを入れて、お湯を注ぎ、よく振った。手の平に一滴落とし、ミルクの温度を確かめてから、赤ん坊を抱っこして、乳首をくわえさせた。赤ちゃんは勢いよくミルクを飲みほした。
「いい飲みっぷりだね。お腹いっぱいになったかな」
男はひょいと赤ん坊を肩にもたせ掛け、背中をトントン叩いてゲップをさせてから、取り込んだばかりの布団に寝かせた。エアコンが直接あたらないようにして、男も隣に横になると、いつのまにか二人は夢の中に…。

ライオンがまた歯をむき出し、怒りをあらわにして怒鳴った。
「あの男は何なんだ！　何してるんだ？　女なのか？　男には他にするべき仕事があるだろ？」
「ライオンさん、お言葉ですが、彼は普段会社で働いているんですよ」
「しかし、あんな内向きでいいのか？　男は外を向かんといかん！　ライオンのオスは縄張りを犯そうとするものを容赦しない。妻や子供たちの日常を脅かすものは取り除くべく戦うのだ。自分の属する社会の秩序を守るため、常に外敵に目を光らせている。なのに、あの男ときたら…」
「人間の男には直接の外敵って存在しないのではないでしょうか」
「じゃ、社会や国の将来のために積極的に行動することはないのか？」
「昔の男は国をよくするために何をなすべきか真剣に考えて、自らを犠牲にしてでも志を遂行しようとしたようですが、今はね…」
ネコも疑問を口にする。
「あの瓶に入れた白い粉は何？」
「粉ミルクですよ。母乳の代用品とでも申しましょうか」
「母親がいるじゃない？　どうしておっぱい、あげないの？」
「あの母親は出かけてしまいましたからね。まあ、母親も働くケースが増えてきて、母親が赤ちゃんのそばにいなくても、だれにでも世話ができるようにと粉ミルクが開発されたんですよ」
「働くって。その仕事はその人じゃないとできない仕事なの？」
「いえいえ、たぶん誰にでもできる類のものじゃないかと…」
「じゃ、子どもがおっぱいを必要としている間ぐらい子どものそばにいてやればいいのに。子どものお母さんは、その子どもを産んだ人にしかできない大切な役割じゃない？　それが子を産み、育てるってことでしょ？」
「世の中には父親も母親も働かないと生きていけない家庭もあるんですよ」
「じゃ、子どもは誰がみるの？」

「保育園とか祖父母とか」
「お金で育児を買ったり、年老いた祖父母を利用するってこと？」
「そう言えなくもないですけど…」
「母親が自分の産んだ子におっぱいもあげられないような環境では、子を持つべきじゃないと思うわ。そんな状況では子どもは幸せになれないんじゃない？」
「ネコさん、なかなか厳しい意見ですね。そんなこと言ったら、人間社会では総攻撃されますよ、たぶん」
「あら、どうして？　真実を言ってるのよ。お金がないと、心も貧しくなって余裕もなくなって温かい家庭なんて望めないし、おっぱいあげることより、仕事や遊びを選ぶような母親は母性が欠落しているか、未熟なのよ。そんな母親の下では子どもは不幸になるの目に見えてるわ」
「なるほど」
「人間は一人か二人しか子どもを産まないくせに、育児ノイローゼとか産後鬱とか騒ぐ。しっかり育てろって言いたいわ。わたしなんか一度に五、六匹産むのよ。父親なんて当てにならないから、一人で育てるわ。昼間は自分が栄養つけなきゃいけないから、エサを探して歩きまわり、夜はお腹を空かせて待っていた子どもたちにおっぱいをやるのよ。子どもの成長につれて、住処も移動させなくちゃならないんだけど、わたし一人で一匹ずつ咥えて移動するのよ。いつも危険がいっぱいだわ。それに比べると、人間の女って楽ね」
　ライオンのメスも同調する。
「わたしたちは群れの中で子育てをするから、メス同士協力し合うわ。そこは恵まれているわね。ただ、ライオンの世界では狩りをするのはメスの仕事。群れのメスがみんなで獲物を追いかけ、追いつめ、襲うのよ。きつい仕事よ。獲物がとれないと、群れのみんなが餓死してしまう。食べるのはオスが先だけど、わたしたちメスは、オスたちも自分たちの責任を果たしているのを理解しているから、文句は言わないわ。本当に人間のメスは軟弱だわ。外の世界に目を向けなくなった男もどうかと思うけど」
「『育メン』は広まっているようですよ」
「バッカじゃないの。オスのメス化でしょ」
　ネコとライオンが口をそろえて、吐き捨てるように言った。

　その頃、外出先のママはというと、若い「イケメン」と食事の真っ最中。
「ご主人には何て言って出てきたの？」
「女友達に会って、ショッピングに行くって。うちの旦那「育メン」だから、子どもと一緒にいるのが楽しいのよ」
「いいご主人じゃないか。大事にしないと…」
「まあね」
「月曜から金曜まで会社で働いて、週末は子どもをみてくれるんだろ？　大変だと思うよ」
「会社でたいした仕事してないのよ。子どものためなら、すぐ有給取るし。彼がいなくても全く影響ないみたい。今にリストラされるんじゃないかと思うわ」
「仕事ができる男は「育メン」なんかやってられないし、夫に求めすぎたらだめだよ」
「でもね、マイホームパパになりそうな人を選んだのはわたしだから、言いにくいけど、

彼といても、ちっともときめきがないのよ。」
「結婚したら、恋人じゃないんだから…」
「二人で目標に向かって走る醍醐味とか、人生における思いがけない展開とか、彼と一緒に味わうなんて、想像できないの」
「ないものねだりだよ。安定か冒険か、だろ？　ご主人に感謝しなきゃ、罰が当たるよ」
「そうね。僕の子どもだから、僕のＤＮＡが半分入ってるから、面倒をみるのは当たり前だって子どもの面倒、よくみてくれるわ。知らぬが仏とはいうものの、なんか気の毒ね。フフフ…」
「さあ、そろそろ行こうか。スリリングな非日常の時間を楽しもう」
「ええ」
　男の手にはホテルの部屋の鍵が握られていた。
　こんなドラマが別の場所で繰り広げられているのを夫も見学者も知る由もなかった。

　四階に下りると、そこには「ストーカー」というプレートが貼り付けられている。サルが説明する。
『『ストーカー』というのは、相手が嫌がっているにもかかわらず、付きまとったり、しつこくメイルや電話をして、自分の好意を押し付ける人のことで、エスカレートすれば、レイプや殺人のような刑事事件にも発展するおそれがあります」
　アザラシが質問する。
「どんな人が『ストーカー』になるんですか」
「老若男女、だれでもなる可能性はあります。特に別れ話を持ち出された男が女に執着することから『ストーカー』化することが多いようですが、最近は六十歳以上の思い込みの激しい男性がストーカーまがいの行為を平気でするようになってきたようですよ」
「執着ですか…」

　その部屋には真剣な表情でスマホを見つめている男が一人、ソファーに腰かけていた。遮光カーテンを閉めきった薄暗い部屋には写真立てが三つあって、恋人と思われる可愛らしい女性とその男が微笑んでいる写真が飾られている。男は二十四、五歳だろうか、有名ブランドのＴシャツとクロプト丈のパンツを無造作に身に着けた、彫りの深いなかなかのイケメンだ。流行にも敏感だし、スラッと背も高く、女の子にもてるタイプに見えた。食い入るように見つめているスマホの画面には絵文字などの全くない硬い文字が並んでいる。
「あなたとはもう別れたでしょ？　いちいちわたしの行動、あなたに言う必要ある？　付き合ってるとき、二時間ごとに『今どこ？』『誰と一緒？』『何してる？』って、しつこくメイルしてきて、すぐ返信しないと切れたわね。別れたんだから、わたしが何をしようと、わたしの勝手でしょ。もう連絡しないでほしいの。あんまりしつこいと、警察に言うわよ」
　男の顔が醜く歪み、震える指でメイルを打つ。
「悦子のことが大切だから心配なんだよ。悦子のこと一番理解してるのも一番愛してるのも俺なんだよ。別れるなんて言わないでくれ」
「わたしのこと理解して信頼してくれていたら、二時間おきにわたしの行動を確認する必要なんてないでしょ。初めは愛情の表現かなって思ってたけど、束縛でしかないことが分

かったの」
「愛すればこそ縛りたくもなるんだよ。おまえのために俺がどれほどのことをしてやったか分かってるのか？　ブランドのバッグやリングをプレゼントし、有名レストランを予約し、ショッピングや映画にも付き合ってやったんだ。おまえが喜ぶ顔がみたかったから。楽しかったじゃないか。それなのに、俺と別れようなんて許せるわけがないだろ？」
「そんなこと言い出すなんて、やっぱりセコイ男ね。あなたが許そうが許すまいが、わたしはもうあなたのこと、愛していないんだから、別れます」
「勝手なことを！　ただじゃ済ませないぞ！　覚えとけよ！」
　男は爪を噛みながら、部屋の中をグルグル歩き回っていたと思ったら、彼女とのツーショットの写真の入った写真立てを床に叩きつけた。男は突っ立ったまま、カバーのガラスが粉々に砕け散った写真を、しばらく見つめていたが、突然しゃがみこんで、写真の彼女を撫でながら、泣きじゃくり出した。ひとしきり泣いた後、暗い顔をして立ち上がり、いつも掃除用に使っている手術用手袋と、ナイフと着替えを黒いバッグに詰めると、こっそり作った彼女のアパートの部屋の合鍵をポケットに入れ、全身を鏡に映してニヤッと笑った。

　サルはその様子を見て、慌てて言った。
「皆さん、男が部屋から出てきますので、ご注意ください。緊急事態ですので、わたしは少々お時間をいただきまして、管理課に連絡を入れておきます」
　サルは緊急用の回線を使って管理課にストーカーのプレートの男の状況を述べて、その男を見張ることと、場合によっては拘束が必要である旨を伝えた。
「皆さん、お待ちどうさまです」
　クジャクが尋ねた。
「あの男は何をしに行くのですか」
「たぶん元カノのところへ、彼女を殺しに行こうとしていると思います」
「振られたから？」
「そうです。あの手の男は自分自身に自信を持っていて自己愛が強いんですよ。こんな素敵な俺様が付き合ってやってるのに、俺様をないがしろにするとは許せないって感じでしょうか。それに幼稚性がプラスされて、せっかく手に入れた楽しい時間と可愛い恋人を無くすのが怖いんです。執着して駄々をこねる」
「潔くないですね。僕たちはカラフルな羽を精一杯広げふるわせて、一生懸命メスの愛を得ようとアピールしますけど、全然振り向いてもらえない時もありますよ。そんなときはきっぱり諦めるしかないですよ。また違う相手を探します」
　ゾウアザラシも赤い袋を膨らませて、賛同する。
「そうそう。特に子育て中のメスは子どもを守ることで頭がいっぱいだから、妙なアプローチをしようものなら、ものすごい剣幕で追い払われますよ。退散しないと、怪我をすることにもなりかねません。恐ろしい！　だから、俺たちレイプなんてしませんよ。メスは他にもいますからね。嫌がるメスに生殖行為を迫るなんてあり得ないですよ。人間のオスはあきらめないんですか？」
「人間のオスには妙なプライドがありますからね。なかなか厄介なんですよ。何の裏付け

もない男のブライト！」
　アザラシは自分の考えを述べる。
「人は二本足になって、手が二本になって自由に使えるようになった結果、いろいろ悪いことができるようになったみたいですね。レイプもその一つでしょうか。虫も魚も動物もそんなことはしませんよね」
　サルが情報を提供する。
「イルカのオスは集団で一匹のメスを取り囲んで、メスに逃げられないようにして生殖すると聞いたことがあります。なまじ知能が高いとろくなことをしかねないということでしょうか。さあ、三階も覗いてみましょう」
　サルに促され、一行は三階に下りた。三階は「ヤンママ」の部屋だった。ネコが確認する。
『『ヤンママ』ってヤング・ママ、つまり、若いお母さんのことですよね」
　サルはやはりそう来ましたかという顔で訂正する。
『『ヤンママ』は『ヤンキー・ママ』のことなんです。昔、ヤンキー、つまり、不良で突っ張ってた女の子が子どもを産んだ場合、お母さんになってからも、突っ張ってるというか…。まあご覧になれば、お分かりかと思います」

　部屋には若い女と赤ちゃんがいた。赤ちゃんは反り繰り返ってギャーギャー泣いているが、若い母親はペディキュアするのに夢中で、赤ちゃんはベビーベッドの中に放りっぱなしにされていた。女は金髪に脱色した髪の毛をポニーテイルにし、黒々としたつけまつげをつけて、ゴールドのスパンコールが胸元に付いた赤いタンクトップとデニムのショートパンツを身に着けていた。真っ赤なペディキュアを乾かしながら、スマホでしきりにしゃべっている。友達をショッピングに誘っているらしい。
「これから、出られる？」
「どこ、行くの？」
「オープンしたアウトレット」
「買い物？」
「まあね。夏のバーゲンしてるじゃん！」
「ユキんち、母子だよね。きつくないの？」
「母子だからこそ、余裕があるんじゃない！」
「えっ？　どういうこと？」
「母子家庭だと、生活保護を申請して認められたら、月に二十万、もらえるんよ。下手にバイトするより、よっぽどいいよ」
「えっ？　二十万も！　友達に旦那がフリーターの子がいるけど、自分も働いてるよ。小さい子、保育園に預けて。ふたりで、月二十万ぐらいにしかならないって言ってた」
「人間、頭使って、うまく世の中渡って行かないと損だよ」
「そういうもんかな？　生活保護もらうって、抵抗ない？」
「ある種の権利だって思うけど…」
「ふうん。ユキは昔っから要領よかったからね。元旦那は元気？」
「うん、元気みたいだよ。真面目に働いてるって、あいつの友達、言ってた。離婚してか

ら会ってないけど…」
「やっぱ妻に逃げられたのが効いたのかな？　で、何時に待ち合わせる？」
「今十二時前でしょ？　十二時半にアウトレットの入り口で。ランチもしよう！」
「オーケー。じゃ、またあとでね」
　電話し終わったヤンママは、放っておかれて泣き疲れたせいで、放心状態の赤ちゃんに一張羅のブランドのベビー服を着せた。自分も赤いルージュを引くと、クローゼットから黄色のバッグを取り出して、オムツや着替え、お茶の入った哺乳瓶も詰め込んだ。それから、玄関に置いてあるバギーを片手に持って、赤ちゃんを抱きかかえると、出かけようとした。そのとき電話がかかってきたので、バギーを置いて、電話に出た。
「ああ、翔？　今から出かけるとこよ。今日も夜来るの？」
「ああ、カケルの顔も見たいしな。ボーナスも入ったから、どっかに食いに行こうよ」
「やった！　わたしたち、離婚して正解だったよね？　結婚してる時より、生活、うんと楽になったもの。離婚届出しただけで、母子家庭になって色んなメリットも手に入ったし、生活保護も受けられて。紙切れ一枚のことでね」
「おまえ、あんまり大きな声でそんなこと言うなよ」
「大丈夫よ。法律上何の問題もないじゃん？　わたしたち、法律的には正式に離婚してるんだから」
「そりゃ、そうだけど」
「じゃ、もう出るから、またあとでね」
　ヤンママは、バギーをひょいと片手で持ち上げると、鼻歌交じりに階段を下りて行った。

　クジャクのメスは笑いながら言った。
「何、あの恰好！　派手なオスドリみたいね。オスならメスを惹きつけるために鮮やかな色やスタイルを誇示するものですけど、女でしょ？　どうして？」
「人間社会では女の方が身を飾りますね。化粧したり、カラフルな色の服をまとったり。まあ、あの女性の場合は独身時代のファッションをそのまま続けているんでしょうね。ヤンキーは派手ですから」
「じゃ、人間社会は男性優位の社会ですね。子どもを産むのは女だから、生物学的には女性優位であるべきなのにね」
「社会が大きく複雑になればなるほど、階級や権力が生まれますよね。権力志向は男の方が強いのかもしれません。男がリーダーとなる社会では、男が女を選ぶという図ができるのでしょうね」
　ライオンのメスは母親の行動にダメ出しをする。
「夏の昼間はお昼寝をさせるべきよ。バギーで出かけるなんて、あり得ないわ。コンクリートの道を歩くと、赤ちゃんの座る場所がどれほど暑くなるか分からないのかしら。バカな母親だわ」
　キリンも母親の生き方に疑問を唱える。
「母子家庭で貧しいから、国に養ってもらってるのに、それを自慢するなんて。私たちの世界では自分で生きていく体力や能力のないものは死ぬしかないわ。厳しいけど、みんな最後まで必死に自分で生きようとしている。人間社会では、重い病いや障害、あるいは高

齢で自分一人では生きられない人に手厚い保護がなされているけど、それを負担しているのは、いわゆる健常者の二十歳から六十歳くらいまでの人たちだそうですね。子育てとハードワークの中での負担ということでかなりきついのではないですか。」
「そうですね。でも、助け合いの精神を制度化したものが社会保障ですからね。人間は人口が増えて、家族単位じゃなく、それらが集まって形成された大きな社会のなかで、その一員として生活するようになったでしょう？　そして、一人では生活できない人をみんなで支えるシステムを取り入れたのです」
「困っている人がいたら、その身内や周りの人が助けることはしないのですか」
「もちろん、放っておきはしないでしょうけど、お金を援助するにしても介護するにしても、個人でする分には限度があるのです。人間は高齢や病気で動けない人を死ぬまで世話しようとする生き物ですからね」
　ネコはサルの言うことに頷きながら、ポツリと言った。
「わたしたちは死期が近いと悟ったら、最後の力を振り絞って、誰にも知られないように、一人で里山や竹藪に身を隠すのよ。そこで、静かに死を迎えるわ。人間は自分自身で死の幕引きができないのね」
「そうですね。それに、そのシステムを悪用するというか、嘘をついて、生活保護をもらおうとする人も多いみたいですよ。法の盲点をついて、いかに額に汗をせず、金をせしめるかというようなことばかり考えている輩はいつの世にもいますけどね。あのヤンママもその類でしょうね。人として何か大切なものを安易に捨ててしまう人が増えているようですよ」
　動物たちはヤンママの赤ちゃんの行く末を案じつつ、二階に下りた。二階には「草食系男子」なる生き物が生活している。草食動物であるキリンがまっとうな質問をした。
「草食系っていうことは、野菜しか食べない男のことですか？」
「いえいえ、食べ物の好みのことではありません。生きる姿勢とでも言いましょうか。　何事においてもガツガツしないというか、欲望が薄いというか。特に恋愛に相手の肉体を求めないタイプの男です」
　サルの説明を聞いたライオン、ネコ、キリン、アザラシ、クジャクは一様にポカンとした顔になった。ライオンが代表して質問した。
「自分の子孫、つまり、ＤＮＡを残したくないのか？」
「生殖行為そのものが面倒くさいと感じるようですよ」
　一同の憤りは爆発した。
「そんなオス、生存する価値、ないじゃないか！」
「まあまあ、お怒りはごもっともなんですが…。そのような独身の男の様子、ご覧ください。ちなみに、彼は定職にも就いていますし、友達もそこそこいます」

　男の部屋には若い女がいた。女は昼ごはんにチャーハンを作っているようだ。この部屋にはよく来ると見えて、調味料の在り処や皿の置き場所など、男に尋ねることもなく、さっさと作り終えると、食卓にチャーハンと野菜スープを並べた。
「できたよ、マー君。早く食べよう」
「ああ」

マー君と呼ばれた男は、スマホのゲームを中断して食卓に着いた。
「マー君、ごはん食べたら出かけようよ」
「このクソ暑い中？」
「せっかくのお休みじゃない？　海に行きたいな」
「海？　紫外線強すぎて疲れるよ」
「じゃ、美術館に行く？　印象派展やってるよ」
「昔々の絵、見て、何がおもしろいんだ？」
「じゃ、ずっと家にいるの？」
「うん。嫌なら帰れよ」
「会社にいるときのマー君は、そこそこ仕事もできて、かっこいいのに、スイッチがオフになると、息してるだけね」
「オンとオフ、使い分けが大事だろ？」
「そりゃ、そうだけど…。じゃ、うんとオフしようよ」
女はそういうと、男に近づき、後ろから抱きついた。男はさっと身をかわし、立ち上がった。
「食欲が満たされたら、今度は性欲を満たそうとするのか？　動物レベルだな」
「あら、だったら、あなたは何？　動物としての本能を失った動物以下の生き物？」
「仕事はきちんとこなしているし、社会の規範からずれたことはしていないつもりだよ」
「とか言っても、仕事はノルマをこなしているだけでしょ？　自分から何か提案や提言したことないよね。マー君って積極的に何かやろうとすることあるの？　趣味でもいいよ、スポーツとか音楽とか。いつもスマホのゲームばっかり」
「ジム通って、一生懸命エクササイズやって汗流しているヤツとか、ちっとも上達しないのにテニススクール行ってるヤツとか見ると、バカじゃないかって思うよ」
「どうして？　体を動かすのはいいことよ」
「むやみにがんばりすぎてて、暑苦しくてウンザリするんだよ」
「だから、何もしないの？　うちの会社も海外進出するみたいだよ。自分をレベルアップして海外に出て行こうとは思わないの？」
「今のままでいいよ。食っていけてるしさ。出世とか考えてないし」
「つまらない人ね」
「現状に満足することは悪いことじゃないよ」
「若いのに気の毒だわ。結局何もしないことの言い訳じゃない？」
「おまえは肉食系だろ？　俺たち合うはずないよ」
「そうね。あなたは一生ゲームの中の仮想空間で遊んでいればいいわ！　わたしは健康な男と結婚して子どもを産みたいの。女が子どもを産むのに適した期間って案外短いのよ。あーあ、回り道しちゃったわ」

草食系のキリンは怒りに身を震わせている。
「あんなのと僕たち草食動物を一緒にしてほしくないな。僕たちは草を食べるけど、あの男みたいに生きることを怠けたりはしていないよ。ナワバリを守ったり、メスを獲得するためには、命を懸けて戦うんだ。僕たちは首をぶつけ合って戦うから、首の骨を折って死

んでしまうヤツだっているよ。僕たちだけじゃなく、鳥だって虫だってメスを得るために、己のＤＮＡを残すため、ひいては、自分たちの強い種を存続させんがために必死に戦っているんだ。なのに、あいつときたら…。女の言うとおり、生物学的に価値のない生き物だよ。『草食系男子』って言い方、やめてもらいたいな。『生きているけど生物学的に無価値の男』とでもしてもらいたい」

ライオンがアイデアを披露する。

「それじゃ、呼称としては説明的すぎるぜ。『無能＆不能』はどうだ？」

「なかなかいいですね。シンプルでインパクトがある」

動物たちは不可解な人間の行動にいささか苛立っているようだった。首を振ったり、尻尾をパタパタさせている。サルはみんなをなだめるように言った。

「人間という種は私たちの常識や価値観とは異なった生き方をすることも多々あってなかなか興味深い対象ではありますね。そろそろ最後の階になります」

一階には「アンチ・エイジング・マニア」というプレートがついていた。ネコが首をひねっている。他の参加者も首を傾けているのを見て取ったサルは解説した。

「『アンチ』というのは『反対する』ってことで、『エイジング』は『年を取ること、老化』ということですから、『アンチ・エイジング』で老化に抵抗するということになりましょうか。平たく言えば、年と共に増えてくる皺や弛みを放っておかないで、減らしたり、なくしたりするよう対処することです。主に外見的なものを指しますが、頭の活性化も含めて、いつまでも若々しくいることに関心を持ち、そうなるように日々努力する人を『アンチ・エイジング・マニア』と呼びます。女性が主流ですが、最近は男性の中にも若く見られたい人がいるようですね」

ネコは依然として納得できない様子で尋ねる。

「長く生きていると、わたしたちも毛並みに艶がなくなるし、目も悪くなって動きも鈍くなってくるものですけど、それは自然の摂理だから、諦めるべきことではないの？　みんなに訪れる老化に抵抗できるの？」

「ある程度は老化を遅らせることができるようですが…。野菜や発酵食品中心の食事と、有酸素運動がすすめられています。有酸素運動というのは、ウォーキングといった、あまり激しくない持続性の運動のことです。朝夕、ジャージ姿で歩いている中後年をよく見かけますよ。あと、薬のように口から摂る様々なサプリメントと呼ばれる栄養補助薬品もありますし、究極のアンチ・エイジングの手段として手術もありますが…。まあ、一階の五十代の女性の日常を覗いてみましょう」

鮮やかなオレンジ色のシフォンのスカートに黒のタンクトップを身に着けたスラリとした女性が、お盆に十穀米のカレーとアボカド・トマトのサラダをのせて持ってきて、居間のテーブルに置いた。ソファーにはちょっとふっくらした体型をチュニックに包んだ友達と思われる女性が座っている。脇に置いたカバンには彼女の勤めている会社が出した健康サプリメントの新製品の試供品が入っていた。

「わあ、おいしそう！　グリーン・カレー？」

「そうよ。召し上がって！」

「いただきます。辛くておいしいわ。わたしもタイ料理は大好きなの」

「真知子に気に入ってもらえてよかった。主人はタイ料理ちょっと苦手みたいなの。きょうはゴルフに行っちゃったけどね。わたしは体のためにも玄米にしたいんだけど、主人が白米にこだわるもので、十穀米のパックを白米に混ぜて炊いてるの。アボカドもトマトも女性にとって理想的な食べ物なのよ」
「梨絵はいつも若々しくて羨ましいわ」
「そういえば、この間、街頭でアンケートしてた若い男の人に三十代ですか、なんて聞かれちゃったわ。フフフ…。もう五十すぎてるのにね。」
　真知子と呼ばれた女は少々鼻白みながら、台所のカウンターにずらっと並べられたサプリメントのボトルに目をやった。
「サプリメント、いろいろ飲んでるのね」
「ええ、テレビのコマーシャル、見ると、つい欲しくなっちゃうのよ。飲み始めると、やめるのが怖いっていうか…。グルコサミン、総合ビタミン、ブルーベリー、黒酢、セサミン、スッポン、酵素、プラセンタ…」
「飲み過ぎじゃない？　逆に体に負担をかけることはないの？」
「効果はおいといて、体は調子いいから、大丈夫と思うけど」
「ふうん。プラセンタって動物の胎盤でしょ。気持ち悪くない？」
「別に。わたしたち、牛や豚の肉も内臓も平気で食べてるじゃない。胎盤だって内臓の一つでしょ」
「サプリメントって高くない？」
「そうなのよ。月に一万円以上使ってるのよね」
「もう少し絞ったらどう？　いろいろ分けて飲まなくても、一本で事足りるようなのが出てるわよ」
　と言いながら、バッグから新製品を取り出そうとした。ところが、梨絵は真知子の意図に気が付かない様子で言った。
「うーん、でもね、一粒でなんでも摂れるって怪しくない？　成分量だって少ないに決まってるでしょ。今飲んでるのやめたくないし」
　真知子は慌てて、出しかけたサンプルをバッグに戻した。
　梨絵は真知子の気持ちなどお構いなしに、続ける。
「ねえ、ここ見て！　眉間の皺、なくなったでしょ」
「ほんとだ。この皺、人相悪くするのよね」
　真知子は自分の額の皺を触りながら、顔をしかめて言った。
「ここにボツリヌス菌、入れたのよ」
「そんな食中毒を起こすような菌、入れて大丈夫なの？」
「筋肉を麻痺させるのかな？　よく分からないけど、表情が穏やかになったでしょ？」
「そうね。でも、よく見ると、そこだけ表情消えた感じがする」
「まあ、効果はどうせそんなに長く続かないから」
「アンチ・エイジングもお金がかかるね」
「主人も呆れているわ。何も変わらないのにって。でも、わたしの趣味だと諦めてるみたい」
「さすがに美容整形にだけは手を出さない方がいいわよ。どんどんエスカレートして、い

ろんなとこ触りたくなっちゃうみたいだから」
「そうかな。きれいになれるんだったら、プチ整形くらい、いいんじゃない？」
「だれのため？　何のため？　梨絵はいまのままで十分きれいじゃない？」
「若々しくきれいになれば、自分に自信が持てるわ。自信が持てれば、生き方も変わるはずよ」
「偽物の顔でもいいの？」
「そうよ。手術で手に入れた顔はもう自分の顔なのよ。『人は見かけが九割』って本書いた人もいたでしょ。外見がものをいうのよ」
「韓国じゃ、就活前に女も男も美容整形するのが当たり前みたいなこと、テレビでやってたわ。周りの人も整形してるの承知してて、嘘の顔でもきれいな方を採用するってことかな？」
「韓国ほど外見を重視する国はないんじゃない？　元大統領も整形してたんでしょ？　化粧品もカタツムリの体液みたいな怪しいものもたくさんあるし。日本人もよく買いに行くみたいだけど」
「女の美への執着にはすさまじいものがあるよね」
　二人はカレーとサラダを平らげたあとも、夫や子どもへの愚痴、ワイドショーのネタなどについてとりとめのないおしゃべりを続けていたが、真知子は時計の針が二時を指すと、身支度をしながら言った。
「そろそろ帰らないと、孫を幼稚園に迎えに行かないといけないし」
　脈のない客のもとからはさっさと退散したかったのだ。
「あらあら、孫守りも大変ね。おばあちゃん！」
　梨絵がそう言って、バカにしたように、大きく口を開けて笑った瞬間、小さくプチっという音がした。
「えっ！」と、自分の顔に手を当てた梨絵は顔の筋肉の緊張がなくなっていくのを感じた。梨絵の顔を見ていた真知子は飛び出さんばかりに目を開いて、パクパクしている。
「梨絵、あなたの顔が…、顔が…」
　そう叫ぶと、真知子は転がるように玄関を飛び出していった。
　梨絵は鏡の前に立っていた。瞼も頬も唇も重力に引っ張られて、力なく垂れ下がっていた。目は開けているのに、瞼が邪魔で見えにくい。まじまじと己の顔を眺めていた梨絵は「化け物！」と自分自身に投げつけた。

　動物たちは怖がってギャーギャー騒いでいる。サルはなんとか落ち着かせようと必死だ。
「皆さん、大丈夫です。落ち着いてください。彼女は化け物になったわけではありません。彼女は美容整形の手術をしていたんです。年を取るにつれて垂れてきた瞼や頬を引き上げて、すっきり見せるためのリフトアップという手術です。顔の皮膚の中に何本も糸を入れて、こめかみ辺りでひっぱり上げるようなものらしいのですが、今大きく笑ったひょうしに、リフトアップに使っていた糸が切れてしまったのでしょう。それで、一瞬で元の弛んだ顔にもとってしまったのです」
　ネコは理解に苦しむといったふうに、口を尖らせて唸るように言った。
「長く生きていれば、毛もばさばさになるし、皮膚も弛むわ。でも、病気じゃないでしょ。

老化は死ぬことへの準備でもあるのよ。病気じゃないのに、薬を飲んだり、手術をしたりするなんて、分からないわ」
ライオンも呆れている。
「自然に逆らわず、老いと死を静かに受け入れていくのが賢明なのだ。人間というのはどれだけ若さにこだわる生き物なのだろう。見かけの若さに固執するより、内面を鍛え、精神を常に柔軟に保つことのほうが意義があると思うが。そういうことには時間も金もかけないのか。見下げ果てた種だ」
サルはしばらく考えて、こう言った。
「私たち動物は、この世に誕生し、子孫を残し、死んでいくことを受け入れてきました。一つの個体のサイクルは一年以下のものもあるし、二十年以上のものもありますが、個体はなくなっても、遺伝子が引き継がれていくことに、種が存続することにわれわれは意義を見出しているのです。一方、人間は大昔から「不老不死」を望んでいたのです。権力や富、名誉を手中にしたものも、田舎で穏やかな生活を送っているものも、老いることのない人生、死ぬことのない人生を得るためなら、ある程度の犠牲を払うことに躊躇しないでしょう。遺伝子の伝達よりも、自分という個体に執着するのが人間なのかもしれませんね」

人間観察アパートの見学を終えた動物たちがサルを囲んで感想を述べている。
「この人間観察アパートの見学に参加して、どうして人間が絶滅危惧種になってしまったのか分かった気がします」
「生き物としての健全な本能を無くしてしまったからかな」
「そうそう。地球上の生き物の一種であるにもかかわらず、遺伝子を後世に送って行こうとする使命を忘れてしまった」
「それにともなって、生殖本能、母性本能、闘争本能なども無くしてしまった」
「潔さという美徳も、恥という概念も人間の精神から消えてしまったようですね」
「絶滅も時間の問題です。人間の生存している地域は、わたしどもの管理している範囲では、今見ていただいたアパートを含む一角の他に、同じようなものが後二か所ございます。違う業者の営む施設があちらこちらに十か所、設けられているのみですので、人間の総数はかなり減っていますよ」
「わたしたちも気をつけなければなりませんね」
「人間は本能と引き換えにいったい何を手に入れたのでしょうか」
「さあ？　そんなにいいものを手にしたとは思えませんが…。わたしたちは動物の本能にしたがって、健全に生き、種を残していきましょう！」

動物たちは人間居住地を出ると、大きく雄たけびをあげ、各々の社会に胸を張って戻って行った。

〈了〉